

# 国境を越える未来へのインスピレーション

## 国際人のパイオニア、津田梅子に手紙を書こう！

### 津田梅子のスピーチを日本語に訳そう！



reproduced by kind permission of the Principal and Fellows of St Hilda's College, Oxford

サンフランシスコにいよいよ入港する「アメリカ号」の甲板から身を乗り出すように、眼前に広がる新世界を見つめる着物姿の一人の少女。津田塾大学に展示されている日本画「アメリカ留学(津田梅子)」(守屋多々志作)は、1872年1月15日に岩倉使節団の一行に加わった初の日本人女子留学生5人が、新たな世界に歩みゆく象徴的な瞬間を描き出している。7歳(出航時は6歳)の津田梅子は最年少、船上から凜としたまなざしを投げかける表情が印象的だ。10年にわたってアメリカで教育を受け、のちに自由に女性が羽ばたける未来に向かって日本の女子教育の先駆者となり、1900年に津田塾大学の前身となった女子英学塾を創設した。

津田梅子にとって、最初の渡航が彼女の人生を決定する大きな「異文化体験」であったことは言うまでもない。さらに国際人のパイオニアとして活躍する舞台が到来する。サンフランシスコ到着から四半世紀を経た1898年、すでに二度のアメリカ留学を経て日本で英語教師として教鞭をとっていた彼女は、アメリカのデンバーで開催された第四回万国婦人連合大会に日本を代表して出席後、イギリスからの招待を受けて初の渡英を経験する。当時イギリスでも女子に固く門戸を閉ざしていたケンブリッジ大学やオックスフォード大学に、女子学生が受け入れられる光が射し始めていた。梅子を英国に招くにあって尽力したドロシア・ビールは、オックスフォード大学の女子大の一つセント・ヒルダズ・カレッジを1893年に創設し(当時はセント・ヒルダズ・ホールと呼ばれていた)、開校して間もないこのカレッジに、梅子は初の海外留学生として受け入れられたのだった。

イギリス到着は1898年11月12日、それから1899年4月までの数ヶ月間、梅子はその後の人生に大きな影響を与える充実した時間を過ごした。新しい経験と自身の内面を深くみつめる日々の記録が、アメリカでの梅子を支えたランマン夫人に宛てた手記『英京滞留日記』(Journal in London)に綴られている。アメリカとイギリスをたえず意識の中で比較しながら異文化を透視する梅子の視点は、まさに国際人というにふさわしい鋭い感性と洞察力を感じさせる。ロンドンの歴史的な文化に触れ、ケンブリッジやオックスフォードの女子教育のありかたを興味深く考察し、オックスフォード大学では「多くの男子学生の中でたった5人ほどしかいない女子学生」に交じって哲学や文学の講義に出席、キャンパスで「女子学生たちが漕ぐボート」に目を見張った梅子。そのような日々の中で、梅子は当時のセント・ヒルダズ・カレッジの学長ミセス・パローズから「日本」について講演してほしいとの依頼を受ける。それが、「日本の女性」と題して1899年、帰国を1ヶ月後に控えた3月11日にオックスフォードのセント・ヒルダズ・カレッジで40分にわたって行われた講演だった。文化や社会を、歴史的展開の中にある人間の「現在」と関わるものとして捉える広い視野は、それまでの梅子の異文化体験とそれに伴う学びによって育まれたものだといえる。彼女の見事な英語と、日本の女子教育に心血を注ぎたいという熱い思いは、イギリス人に深い感銘を与えた。日本の「国際人」として、彼女はすばらしい文化的架け橋となった。グローバリゼーションという言葉がキーワードとなる100年以上も前に、身をもって国際理解のありかたを示していたことに驚かされる。

渡英中のもう一つの忘れがたい思い出は、「白衣の天使」フローレンス・ナイチンゲールとの出会いであった。1899年3月20日のこの出来事を、梅子は「生涯忘れ得ぬ出来事」として日記に記している。女子教育への熱い思いをナイチンゲールに語った彼女は大きな励ましを受け、帰りに贈られた花束を押し花にして、終生大切にしていた。人の思いは、歴史の中をずっと生き続ける。



ナイチンゲールから贈られた花束の押し花

#### 参考文献

- 『改訂版 津田梅子文書』(津田塾大学、1984年)
- 亀田由子「津田梅子」植木武編著『国際社会で活躍した日本人—明治～昭和13人のコスモポリタン』(弘文堂、2009年)
- 白井厚、白井堯子共著『オックスフォードから』(日本経済評論社、1995年)

## 募集要項

### 1. 募集内容

- 「エッセー」 津田梅子に宛てた手紙という形式で書いてください。英語の場合は400words程度、日本語の場合は1,200字(横書き)程度にまとめてください。
- 「翻訳」 このリーフレットに引用されている津田梅子の英語のスピーチをわかりやすい日本語に訳してください。

### 2. 応募資格

高校生(国籍・学年・性別は問いません。)

### 3. 応募方法

- ①「エッセー」「翻訳」両方に応募してもかまいません。
- ②A4用紙でワープロまたは手書き。
- ③応募作品に、「エッセー」「翻訳」何れかを明記し、氏名(フリガナ)・性別・〒住所・電話番号、高校名(所在県名)・学年を記載した書類(A4用紙)を添付して、郵送してください。

### 4. 募集期間

2010年8月1日(日)～9月1日(水)(消印有効)

たが、そのときの講演の内容が残っていることが最近明らかになりました。それを讀むと、梅子の女子教育に対する情熱とともに、梅子が国際化や異文化理解という今日的な問題を強く意識していたことが分かります。女子英学塾を構想した梅子は、いつの日か日本の女性が「国際人」として活躍することを願っていたのです。インターネットもなく、海外渡航も困難だった時代にこのようなことを夢見ていた津田梅子に思いを馳せてみませんか。従来の手紙形式のエッセーとともに、創立110周年を記念した「翻訳」にも多くのおみなさんが応募してくださることを期待しています。

### 5. 表彰

「エッセー」：最優秀賞1名(賞状及び副賞5万円を贈呈)  
優秀賞若干名(賞状及び副賞1万円を贈呈)  
「翻訳」：最優秀賞1名(賞状及び副賞5万円を贈呈)  
優秀賞若干名(賞状及び副賞1万円を贈呈)

最優秀作品は、10月10日(日)津田塾大学において表彰し、津田塾大学広報紙 Tsuda Today と津田塾大学ウェブサイト、優秀作品は津田塾大学ウェブサイトに掲載・公表します。応募作品は返却しません。応募作品の著作権はすべて津田塾大学に帰属します。

### 6. 入賞者発表

10月12日(火)までに入賞者本人に通知します。

### 7. 提出先・問い合わせ先

〒187-8577 東京都小平市津田町2-1-1  
津田塾大学「高校生エッセー・コンテスト係」  
TEL：042-342-5113 E-mail：essaycon@tsuda.ac.jp

## 国境を越える未来へのインスピレーション

# 国際人のパイオニア、津田梅子に手紙を書こう！ 津田梅子のスピーチを日本語に訳そう！

1899年、英国を訪れていた津田梅子は、滞在中に「日本の女性」と題した講演を行いました。その講演を彼女は次のように始めています。

There is little in a Japanese city or a Japanese house to excite the admiration of a newly arrived stranger in our country. If there be anything that he may like or praise afterwards, it usually does not attract him during the first days of his sojourn. Our streets are narrow, our houses low and built of unpainted wood, the rooms are cold, bare, and devoid of furniture. There is a total lack everywhere of the so-called Oriental magnificence, except perhaps in our temples. One may well ask where are the embroidered robes, the gold lacquers, the cloisonnés of Japan?

当時のヨーロッパでは、鮮やかな日本の着物や浮世絵など、「ジャポニズム」が最新の流行でしたが、ここで彼女はあえて刺繍、金時絵、七宝焼きなどの豪華な装飾には触れず、一見質素な伝統的日本家屋や、日常生活文化を話題に挙げています。当時、最先端の文明国において近代化の恩恵を受けていたイギリス人たちに、日本の質素な生活文化への理解を求めるのは必ずしも容易ではなかったでしょう。

Yet further acquaintance reveals the fact that behind the dull-coloured, tiny houses lie little gems of gardens, —that the bare unvarnished wood-work of a Japanese room is too beautiful to have its delicate grain hidden by rough paint, —that the few ornaments and pictures of a house show out their beauty the more when not surrounded by a hundred other like decorations, and that when each one has pleased the eye for a period, it is replaced by another no less beautiful brought out from the roomy storehouse. The severest simplicity reigns, but it is not a simplicity barren and ugly.

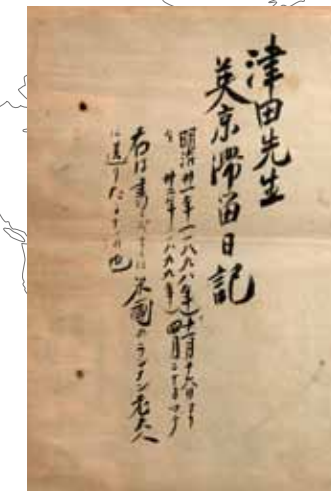
梅子はここで、日本の生活文化のなかに、装飾を排するところに現れる逆説的な質素さの美を見出し、流暢な英語で巧みに説明しています。見た目の華やかさではなく、簡素さから生まれる新しい美—それはまさに、その同じ時期から徐々に現れ始めた近代建築の特徴でもありました。事実、20世紀に国際的に活躍した近代建築の巨匠たち(フランク・ロイド・ライトやブルーノ・タウトなど)は、日本文化のこういった側面からの影響を、自分たちの建築作品に巧みに取り込んでいたと言われています。

海外滞在が長かったにも関わらず、津田梅子は、日本文化への深い理解を持っていたのです。いやむしろ異国での日々が、彼女に日本を外側から見る目を養い、日本独自の美的感覚についての深い洞察をもたらしたのかもしれない。

この巧みな導入の後、彼女は日本の女性が伝統的な家庭生活から、徐々に教育や社会活動に進出していった経緯を説明しています。彼女の教師としての歩みも、このような時代を支える力となってきました。当時すでに華族女学校で教えていた彼女は、自らの体験した欧米文化の精髓を、余すところなく生徒たちに伝えることを目標とし、そのために外国語学習を何よりも重視していました。



守屋多々志作「アメリカ留学(津田梅子)」 津田塾大学所蔵



英京滞留日記表紙

Our young girls in the school take much interest in many of the things which interest you. I hope on my return to tell them of the different countries I have visited, the many and wonderful things of England. They are very ambitious, and enjoy the study of English, although it is most difficult for them.

Our course in English consists of about an hour's lesson a day for the six years' work of our upper department, so that they have an opportunity to gain a fair knowledge of the language, and get some glimpse of the literature as well. They enjoy their studies in English, and we try and give them an insight into Western life and thought. The study of English literature opens a new world of thought to them very different from the ideals and teachings of the old classics of our native literature, or the philosophy and ethics which have come in from China.

外国語学習が単に表面的な言語の習得だけに終わらず、むしろ、文学や文化などの深い理解へと通じるものだというのが彼女の主張でした。それは、学ぶ者にまったく新しい世界を開くばかりでなく、自分自身が生を受けた土地の文化に対する一層深い理解へと結びつくことでしょう—まさに彼女自身にとってそうであったように。

このように明治以降の女性の国際社会への進出を身をもって体現していた津田梅子でしたが、さらなる女性教育の未来への発展を目指して、講演を次のように締めくくっています。

All that has been done hitherto is, however, a beginning only. There is much yet to be done in the present age for our women. The problem of the higher education is before us, and our women are themselves too anxious for better education to be kept back long. The rapid advances made will not end here. I trust the time may not be long before our women will have advantages such as the women of England enjoy in your well-equipped institutions of learning, your colleges and schools. The high standard of intellectual culture demanded not only of your men but of your women as well and the many proofs given of woman's ability to attain to that standard show what women are capable of. It has been an inspiration to have seen this, and been among you.

海外渡航がはるかに困難だった百年以上も昔に、国際文化交流の領域へと足を踏み入れた彼女は、そこから受けた「インスピレーション」を、1900年の女子英学塾設立へと結びつけました。それから110年、さらなるグローバル化の進行する現代に生きる私たちは、外国語を学び、文化を学ぶことからどんなインスピレーションを受け、どのような新しい創造に役立てることができるでしょうか。